

第1話 再会

学会の会場のざわめきの中、童磨はふと一枚のポスターの前で足を止めた。

『昆虫由来毒性物質カンタリジンによる細胞毒性とアポトーシス誘導機構の解析』

タイトルを追う視線が、やがて左端に小さく記された名に吸い寄せられていく。

—胡蝶しのぶ

淡い虹色の眼球が、かすかに震えた。

筆頭演者である彼女の名前に振られた番号の先を追うと、所属である西央大学大学院 薬学系研究科の文字が目に入る。

先に立って歩いていた財団幹部の男は、童磨の様子に気づいて戻り、彼の視線の先を追った。
「…ああ、彼女。去年の秋の学会でうちの賞を獲った西大の学生ですよ。前回はいらっしゃらなかつたから、ご存知無いかもしれませんね。学部で総代を務めた才媛ですよ」

童磨は促して男とその部下を行かせると、ポスターに向こう。細かい文字列やグラフを追う瞳が、色彩を取り戻したように輝きを帯びている。

その時、ふと背後から軽やかな靴音が近づいた。振り向くと、急いで戻って来た様子の小柄な女子学生が、彼を見上げて驚いたように立ち尽くしていた。

その澄んだ瞳と視線が交錯し、周囲のざわめき

が遠のくような沈黙が流れる。

「…やあ。このポスターの発表者の方かな？」
首に下げたネームカードにさつと視線を走らせる。

「…はい」

怯えたような面持ち。

—この子が、胡蝶しのぶ：

想像と少し違った。彼女の名を見た瞬間、殺気とともに針のような鋭い閃光が脳裏を掠めた気がした。
だが目の前に現れた娘は、華奢で、整った顔立ちに儚い少女のような雰囲気を残している。

目を丸くしてこちらを見上げるその愛らしい様子に、童磨はやや拍子抜けして思わず微笑み、指

先で示した。

「ちょっと興味を惹かれて読んでいたんだ。俺には専門外で難しいけど。カンタリジンってどこかで聞いた事あると思つたら、サド公爵が使つたっていう媚薬だ。昆虫の毒だよね？」

しのぶは一瞬ためらった様子に見えたが、落ち着いて童磨の横に歩み出ると、研究者らしい口調で静かに答えた。

「はい。仰る通り昆虫毒：ツチハンミョウ科甲虫に由来する化合物です。確かに、西洋では昔、催淫剤に使われたそうですね。カンタリジンは細胞の中の“信号”を整理する仕組みを壊し、シグナル伝達を乱すんです。捕食者が食べれば、条件によつてはプログラムされた細胞死、つまりアポトーシスを誘導します」

「へえ。体の中の通信網みたいなものが壊され

るってこと？ 毒が細胞のスイッチを押すような感じかな」

「…ええ。動物にとつては致死的な毒ですが、作用の一部を逆手に取れば、がん細胞を選択的に死

に導く薬理作用として応用できるかもしれません」「人を救うために毒を利用するんだね」

「自然界には毒が守りや再生のために働く例もあるんですよ。同じツチハンミョウの雄はカンタリジンを体内に貯めて、交尾のときに雌へ贈与します。雌はそれを卵に移して、外敵から守ります。毒でありながら、次の命を繋ぐ贈り物にもなるんです」

相槌を打ちながら、童磨の意識はほとんど彼女自身に吸い寄せられていた。

理路整然とした口調の硬さを和らげる柔らかい声音には聞き覚えがあった。

董色の目の奥に宿る光は、冷徹で、真に迫つていて、深い湖のように美しい。

「毒が、命を繋ぐ贈り物か。詩的だなあ」

「研究者としては、そういう『境界』に興味があるんですよ。毒の中に潜む希望、みたいな」

しのぶはほんの僅かに微笑んでみせた。彼女を見つめる童磨の眼差しがわずかに熱を帯びる。

会話とは裏腹に、どこか得体の知れない空気が二人の間に立ち込めていた。

しのぶはというと、説明を続けながらも、先ほどから男がこちらを妙に見つめてくるのを感じていた。

もつとも、男性からのそうした視線には慣れて

いた。

内心、またかと思いつつも、気づかないふりをして笑顔を整える。

「ご質問ありがとうございました。展示要旨の方にも参考文献を載せておりますので、もしご興味があれば：」

「ねえ、君。昔どこかで会った事がある？」

「え？」

唐突な問いに、しのぶは驚いて彼を見上げた。虹色の虹彩の向こうの黒い点が、真っ直ぐにこちらを見つめたまま動かない。

柔和で端正な顔立ちは、どこか無機的な異質さすら漂わせていた。

その瞳に捕らえられ、思わず息が詰まりそうになる。

しのぶが返事に窮ると、男はふと表情を崩して

微笑んだ。

「：いや、何でもない。面白かったよ。説明ありがとう、胡蝶しのぶさん」

腕時計をちらりと見る。

「もうすぐレセプションが始まるけど、君も来るの？」

「え、ええ：」

「そっか、じゃあまた後でね！」

笑顔で手を振り、雑踏の中に軽やかに消えていく。

残されたしのぶは、どこかで見覚えのある男の笑顔に、不安にざわめくような胸の鼓動を抑えられずにいた。

(第一話より抜粋)

第二話 書庫より抜粋

密閉された扉をゆっくりと押し開けると、ひんやりとした空気とともに、僅かにかび臭い古紙の匂いが押し寄せてきた。

しのぶは思わず息を呑む。

先に立った童磨が奥のカーテンを開けると、窓の外の緑が外光を落とす薄暗い室内が浮かび上がった。十畳ほどのその部屋には、天井まで届く

書架が壁を覆い尽くしていた。その多くが医学、薬学の専門書で占められ、濃緑や焦茶のクロス装や半革の洋書、古い和本がずらりと並んでいる。

「ここが、例の書庫だよ。屋敷内ですっと保管されてきたんだ。俺はほとんど読まないけど、貴重な本には違いないからそのままにしてあるんだよ」

童磨は照明をつけ、扉の外の温湿度計に目をやりながら何でもないように言う。

だが、しのぶの目は書架に釘付けになっていた。ドイツ語で記された医学、薬学の専門書を中心にお、フランスから輸入された解剖学の図譜。絶版となつた古い辞典、古びた和綴じの本：

（こんな蔵書、大学の図書館でも見たことがないかも…）

しのぶが胸を高鳴らせながら書架を見渡していると、ふいに背後の扉がバタンと閉まった。

はつとして振り向くと、童磨が後ろ手に硬いドアノブを押し下げたところだった。

「一応、温湿度管理してるから閉めさせてね」

途端に、体格の良い童磨の存在がにわかに圧迫感を帯び、しのぶは肝を冷やした。

閉ざされた密室の中で二人きりでいる状態に微かな恐怖と焦りを感じる。

だが、童磨は気にしていないのか、しのぶのすぐ隣に立つと書架を見上げながら暢気そうに語った。

「元々ここは俺の本家筋にあたる親戚の家でね。今は訳あって俺が継いでいるけど、本家の方は医者の家系だったんだよ。初代と、その二人の息子が医学や薬学を学んでいてね。特に長男の方がかなりの収集家で、昭和の初め頃に歐州まで行つて専門書やら標本やらを買い集めたって話だ。ここにある本の大半は、その人が集めたんじゃないかな」

無造作に適当な本を引き抜くと、パラパラ捲りながら童磨は言う。

「七年前の改修の時、専門家に入つてもらつたん

だ。まず、揃つてここまで残つてること自体が価値だつて。バラして市場に流れないで良かつたとも言われたよ」

童磨に促され、しのぶはおずおずと一冊の本を手に取つた。濃い緑のクロス装。ページを捲ると、欄外に戦前の研究者の手書きの書き込みが残つていた。赤鉛筆で引かれた線の先にドイツ語の略記と、日付を記した「Berlin, 28」の走り書き。

見返しには「萬世藏書」と押印された角印が残つていた。

「これが、その方の…？」

童磨は初めて見るかのように覗き込んだ。

「たぶん、そう。この家の二代目の万世：清澄だったかな。俺の大伯父にあたる人。ドイツへ留

学して、毒薬の研究をしていたらしいよ。標本とか薬瓶とかも、家に残ってる。：まあ、ここでは見せられないけどね。あれはちょっと、〃別の部屋〃だから」

童磨は含みを残したように呟いたが、しのぶはすでに本に惹きつけられている様子だった。魅入られたようにページをめくる。

不思議な胸の高鳴りを感じた。ここに眠っているのは、はるか遠い時代に確かに息づいていた人間の一生の探究の結晶だ。時の流れから切り離された純粹な知の空間。

「どう？」 気に入った？」「童磨は、しのぶの様子を眺めながら聞いた。

「はい：驚きました。こんなに貴重な本：」 文字列に視線を走らせながら、しのぶが目を輝

かせる姿を横目に、童磨は楽しげに微笑んだ。

「貴重な資料だろうけど骨董みたいなものだよね。最先端の研究の役には立たないだろうけど、興味があれば触れて見るのもいいんじゃない？ それより、隣の書斎をしのぶちゃんの勉強部屋にするといいよ。下に使つてないプリンターがあるから、必要なら用意しておいてあげる」

童磨はふと思いついたかのように言う。

「ねえ、しのぶちゃん。このあとまだ時間ある？」

「ええ、一応は：」

「そう。もしよかつたらここでしばらく読んでもいいってよ。実はね、ちょっと用事が入っちゃって。一時間くらいで戻ると思う」

「そうなんですか？ それなら、今日はかえつてご迷惑だったのでは：」

しのぶは慌てて本を閉じ、棚に戻そうとする。

童磨は軽く手を伸ばして制した。

「いいの、いいの。仕事のちょっとした呼び出しだから。しのぶちゃんは気にせず読んでて。ここにある本はどれでも好きに見ていいよ。読む時はなるべく書斎で、書庫を出入りする時はそのつど扉だけちゃんと閉めておいてね」

そう言うと懐から名刺を抜き取り、脇に寄せた書見台の上でさらさらと数字を書きつける。

「何かあつたらここに連絡して」

渡された名刺に、童磨の携帯番号が走り書きされていた。じきに戻るね、と身軽な足取りで出ていく。

書庫に一人残されたしのぶは、名刺を見つめた。

以前にも手渡された、見覚えのある名刺。

だが、印字されている携帯番号とは別の番号が

そこには走り書きされていた。

ふいに外で、ブオンと鋭いエンジン音が響く。

はつとして小窓の外を覗くと、黒光りするランボルギーニが裏の車庫を出ていくところだった。場違いに派手なエンジン音が周辺の静けさを裂きながら、やがて遠のいていく。しのぶはやや驚いたような面持ちで、車の消えていく方角を見送った。

歴史を感じるこの時代がかつた屋敷と、派手な車を転がす彼の姿がちぐはぐで、いまいち重ならない。

会うたびに話すことも印象もころころ変わる、掴みどころのない男…。

その時、胸に抱いた本のずしりとした重みと共に、ふと背後から誰かの視線を感じた気がした。

童しの長編小説『鬼の系譜』解説

設定／あらすじ

鬼となって体質こそ変わっても、性格や記憶をそのまま保ち、外見もほとんど変わらなかった童磨。鬼の中でもっとも人間時代との境界がフラットな彼。そんな彼でありながら、人間時代の名は失われているんだなと思いつつ、

無垢な彼を、鬼になる以前から"童磨"たらしてめいたバックボーンがあるはず…と思い、このお話を書き始めています。

彼の生い立ちや彼を生んだ両親、さらには彼らを生み出した家系とは？そして彼にとってのしのぶちゃんとは？という想像を、あえて原作から切り離した現代設定の中に解釈を落とし込んでいます。

大正時代の話も少し出でますが、原作とは異なる世界線。鬼も鬼殺隊も登場しませんが、「鬼」の比喩として家系の狂気や業などを描いていくつもりです。

前編は6話、後編と合わせて全10話～12話を予定しています。

（現在後編執筆中。話数は変更の場合あり）

本編はpixivにて前編を公開中。（22日夜3話/4話・23日夜5話/6話公開）イベント終了後も引き続き掲載しますので、お時間のある時にゆっくり覗いてもらえたなら嬉しいです。

藤雲

【あらすじ】

学会の会場で偶然再会した万世童磨と胡蝶しのぶ。前世の記憶はないものの、互いに既視感が拭えない。

しのぶに強い興味を抱いた童磨は、彼が代表を務める会社の「ゲストハウス」と称する、大正初期に建てられた、とある古い屋敷に巧妙に彼女を招き入れる。屋敷の書庫に魅了されたしのぶは、童磨の計略の元で知らず知らずのうちに囮われていく。

一方、しのぶに貸し与えた書庫の中では、童磨も知らぬところで、彼女の背後に忍び寄る気配があったー

屋敷を舞台に徐々に深まる二人の関係と、童磨に流れる万世家の血の因縁を遡るお話。